

1. はじめに

本シンポジウムのテーマは「杜甫の散文について考える—杜甫文学の全体像を明らかにするために—」である。

ここでは「杜甫の散文」と「杜甫文学」との関係を整理し、杜甫散文研究の意義について二三の作品をもとに考えてみたい。

「杜甫の散文」を詩以外の文章として考える時、次の3つが考えられる。

- 1) 賦
- 2) 賦以外の散文作品
- 3) 詩題や詩に杜甫自身がつけた序文、自注など

現在、大橋賢一教授を代表者とする科研プロジェクト「杜甫散文研究」で主として上記の1) 2) を対象とした研究を行っている。具体的には下記の作品である。

01 天狗賦并序 02 進三大礼賦表 03 朝献太清宮賦 04 朝享太廟賦 05 有事于南郊賦
06 進封西岳賦表 07 封西岳賦并序 08 進鵬賦表 09 鵬賦 10 祭遠祖当陽君文 11 祭外祖祖母文
12 唐故万年県君京兆杜氏墓誌 13 唐故范陽太君盧氏墓誌 14 雑述 15 唐故徳儀贈淑妃皇甫氏神道碑
16 秋述 17 画馬讚 18 奉謝口勅放三司推問状 19 為遺補進岑参状 20 前殿中侍御史柳公紫微仙人閣画太一天尊図文
21 為華州郭使君進滅殘寇形勢図状 22 乾元元年華州試進士策問五首 23 唐興県客館記 24 説早 25 祭故相国清河房公文 26 為閩州王使君進論巴蜀安危表 27 東西両川説 28 為夔府柏都督謝上表 29 越人献馴象賦

吉川幸次郎氏につとに次のような文章がある。

宋人の杜を学ぶ、というのは、文学史の常識である。それをひっくりかえし、時代を錯誤させて、宋人の杜を学ぶに非ず、杜の宋人を学ぶなり、というのは、杜甫の詩の中には、早くも三百年後の宋人の詩となって顕現するものを、先取る性質があるという意味で、なければならない。……杜甫の詩には、いかにも宋人的なものがある。(「杜の宋人を学ぶ」『吉川幸次郎全集 第22巻』筑摩書房、1975年、65～66頁)

杜甫の詩については宋代の詩を先取りしているという議論が早くからある。散文についてはどうなのだろうか。

蘇軾が「秦少游言、『人才各おの分限有り。杜子美の詩、古今に冠たり、而れども無韻の者は殆ど読むべからず。……』(秦少游言、人才各有分限。杜子美詩冠古今、而無韻者殆不可読。……)」(『東坡題跋』巻3「少游の詩文を論ずるを記す」と秦觀の言をとり上げて以来、杜甫の天分は詩にあり、散文は劣るという議論が優勢である。文学史上でも唐代の散文史では触れられないか、否定的に取り上げられるかが多かった(詳細は荒井礼氏の報告に譲る)。

ただ、最近の安藤信廣『中国文学の歴史 古代から唐宋まで』(東方書店、2021年)では

次のように言う。

盛唐期にも、四六駢儷文の優性はつづいた。王維、李白、杜甫らの大詩人も、散文においては、旧来の文体を大きく変えることはなかった。ただし杜甫の散文は四六駢儷文の枠組みにおさまりきらないところがあり、彼の中には新しい文章への胎動があった。しかし、それは微かな胎動であって、明瞭な動きとは言えない。(同書 236 頁)

杜甫の散文に「新しい文章への胎動」があるとすればどのようなものか、それは杜甫文学の本質とどうつながるのか、これが本プロジェクトの問題意識であり、杜甫散文研究の意義になる。このことを2つの点から考えてみたい。

1つは『文選』との関係である。杜甫の詩はしばしば『文選』を詩語の源泉とし、しかも従来になく新しい意味を添えた使い方をするとされるが、同じ意識が散文の中でもあるのだろうか。

もう1つは文体の問題である。漢魏六朝以来の駢文が大きく転換するのは中唐と言われるが、それは単に文章のリズムの上でのことだけではなく、そこにどのような内容を盛るか、ということにも関わる。つまり文章のジャンル(「文体」といってもよいが、駢文か古文かといった文章表現の特色を表す意味にもとれるため、それと区別して「賦」「説」など各種の散文作品の様式の意味で「ジャンル」という)として新たな様式を作り出す胎動があるかという点である。

以下、具体的な作品に即して卑見を述べてみたい。

2. 杜甫の「賦」

杜甫に 01「天狗の賦」という作品がある。玄宗とともに華清宮を訪れた際、天狗院(皇室の庭園で犬を飼育する機関)を見て、天狗(狸に似て白い頭をし、悪者を防ぐことができるとされる獣)に思いを馳せて作った「賦」である。

その冒頭近くに天狗院を見て、

夫れ何ぞ天狗^{りんしゅん}嶼として、氣独り神秀なるや。

(夫何天狗嶼兮、氣独神秀。)

と述べた部分がある。

今、用例を省くが、「嶼」は『文選』では左思「魏都の賦」(巻6)や揚雄「甘泉の賦」(巻7)に見え、建築物が何層にもなってそそり立つことを表す語である。また「神秀」は孫綽「天台山に遊ぶ賦」(巻11)では山の神秘的で美しいたたずまいの形容に用いられている。

しかし杜甫はこれらの語を『文選』から借りて、天狗の様子を述べる言葉として転用し、天狗が百獣の中であって気高くそびえ立つ存在であることを述べていると思われる。

天狗のようなこれまで「賦」の対象とならなかった獣をテーマにしていること自体がまず「賦」ジャンルの中での新しさであるが、その際、『文選』に拠りつつも、過去の用法を逸脱し、新たな表現を試みる杜甫の姿勢が窺える。

そもそも「賦」は「三大礼賦」を玄宗に献上して「奇」とされた故事（『旧唐書』杜甫伝）もあるように、杜甫にとって自信のある特別な文体だったであろう。よって上記のような意識が見られるのも考えてみれば当然である。ただ「賦」に関してはまだ本プロジェクトでは検討がそれほど進んでいないため、詳細な報告は後日を期することとし、続いて「賦」以外の散文について二、三の作品を取り上げてみたい。

3. 杜甫の「説」

「賦」以外の散文では、発表者はこれまで 24「説旱」、27「東西兩川の説」について、ジャンルの面から考察を行った。この二篇はいずれも厳武の幕中にあった時の作で、前者は日照りに対する対策、後者は吐蕃に対する備えについて建言したものである。これらに関して、すでに発表した拙論においてはひとまず次のように結論づけた。

杜甫の「説」は二篇とも当時の社会が直面する問題について、自己の意見を上官に述べたものである。……盛唐期の「説」は政治的な議論を交わす文章として存在していたと考えられる。

（「杜甫「説旱」訳注」『中国文化』第 76 号、2018 年）

盛唐における「説」は相手を説得する文章ではあっても、一種の実用文であり、限定的な場面で用いられたものだった。中唐以後に成立する「説」ジャンルは、盛唐の「説」とは断絶があり、結果的にそこから大きな転換をし、より多くの読者に訴えかける文体を獲得したといえよう。

（「盛唐の「説」について」『中唐文学会報』第 28 号、2021 年）

つまり、杜甫に代表される盛唐の「説」は、中唐以後に現われる韓愈・柳宗元らの「説」（「雑説」「蛇を捕る者の説」など寓言によって感慨を交えながら自己の主張を訴えた作品がよく知られる）とは性格を異にしており、そこには断絶があったと思われる。

ただ杜甫の散文に対する意識は「説」だけでは判断できない。そこで他の散文にも範囲を広げて考えてみたい。

4. 杜甫の「墓誌」

「墓誌」のジャンルより、12「唐の故の万年県君京兆杜氏の墓誌」から一部を例としてとり上げる。これは叔母である万年県君の死に際して書かれた墓誌である。杜甫は幼少の時に母親を失い、この叔母に養育された。

甫、昔病に我が諸姑に臥し、姑の子も又病み、女巫に問うに、巫曰く、「^{はしら}楹の東南隅に^お処る者は吉なり」と。姑遂に子の地を易えて以って我を安んず。我是れを用って存し、而して姑の子卒し、後に乃ち之を走使に知る。甫嘗て人に説^とぐる事有り、客将に涕を出ださんとして、感ずること之を久しくし、相い^{とも}与に諡を定めて義と曰う。

（甫昔臥病於我諸姑、姑之子又病、問女巫、巫曰、処楹之東南隅者吉。姑遂易子之地以安我。我用是存、而姑之子卒、後乃知之於走使。甫嘗有説於人、客将出涕、感者久之、

相与定諡日義。)

杜甫自身と叔母の子がともに病気になった時、叔母が「柱の東南の隅が吉である」という女巫の言に従って、自分の子と入れ替えに杜甫をそこで休ませたところ、杜甫は助かり、叔母の子は亡くなったというエピソードである。

ここで「諸姑」という語に注目したい。文中では万年県君（父と前妻の間に生まれた二番目に年長の娘）を指すので、つまり杜甫は叔母（父の姉妹）の意味で用いている。これはもともと『詩経』邶風・「泉水」に「我が諸姑を問い、遂に伯姉に及ばん」といい、毛伝に「父の姉妹を姑と称す」とあることから、父の姉妹たちという複数の意味で用いられていた。

それが齊の明帝の後である敬皇后の死を悼んだ謝朓「齊の敬皇后の哀策文」(『文選』巻 58)では「思に諸姑を媚^{いづくし}み、我が嬪則（婦道）を貽^{のこ}す」と見え、敬皇后からすれば夫・明帝の母である太后を指している。つまり夫の母を指す一語となった。

杜甫がこの「墓誌」で「諸姑」の語を用いたのは、同類のジャンルである謝朓の哀策文が念頭にあったのではないか。「諸姑」に複数の意味を持たせず単数で用いている点もそうである。しかしそれが指すところは『詩経』で用いられている本来の、父の姉妹の意味に戻している。『文選』を踏まえつつも、新しい表現を試みようとした一例ではないだろうか。

またここに見える記述は実の子よりも兄弟の子を大事にし、その結果、実の子を失ってしまったエピソードを過不足のない表現で書きとめたものである。美辞麗句によって故人を賛美するのではなく、印象的な事実を点描して、その人物の生涯を代表させようとする手法は、中唐以後に韓愈が書いた碑誌と共通する。儀礼的に故人を賛美する「墓誌」から人間を描くそれへの転換が見られるといえないだろうか。

新たなジャンルの発展という点では、次の「贊」についても同様のことが見てとれる。

5. 杜甫の「讚」

「讚」は「贊」と同じで、人物・文章・書画などを称賛するジャンルに含まれる。17「画馬讚」は同時代の絵師・韓幹の馬の絵を称賛した散文である。内容の詳細については大橋賢一「杜甫「画馬讚」訳注」（『中国文化』第 80 号、2022 年）に譲るが、その解題では次のようにこの作品を位置づけている。

杜甫「画馬讚」は、人物としての絵師・韓幹を褒めているという点で「東方朔画賛」を継承している。さらに、その絵画を褒めている点において「画賛」としての新たな「賛」という文体を発展させているとみなすことができよう。

すなわち三国魏・夏侯湛の「東方朔画賛」（『文選』巻 47）の系譜に連なる作品として共通点を見出しつつも、絵画そのものへの言及という点で一步進めているとする。杜甫が画に描かれた馬について述べている部分を引けば、次のようである。

彼の駿骨を瞻れば、^{まこと}実に惟れ竜媒なり。漢歌燕市、已んぬるかな茫なるかな。但だ見る驚駘の、紛然として往来するのみなるを。

（瞻彼駿骨、実惟竜媒。漢歌燕市、已矣茫哉。但見驚駘、紛然往来。）

「駿骨」は駿馬の骨。「竜媒」は天馬をさす。画に描かれた駿馬の骨をよく見ると、確かに天馬のようだ、とその画の馬を褒める。その後の「漢歌」は駿馬の登場する漢の「天馬歌」、「燕市」は燕の昭王が死馬を高く買って駿馬を求めた故事、「驚駘」は馱馬のこと。つまり、「天馬歌」や燕の昭王の故事に見られる駿馬は遠い過去となり、現在は馱馬がいりまじって往来するのを見るだけだ、という。杜甫は詩にしばしば馬を描き、士の不遇の比喻とする（高木正一「杜甫の馬・鷹の詩について」『六朝唐詩論考』創文社、1999年に詳しい）。ここにもそれがこめられているとすれば、これは画から触発された感慨であり、単なる絵画の賞賛にとどまっていない。

6. おわりに

ごく限られた作品の、しかもごく一部からではあるが、杜甫の散文と『文選』の関係、杜甫の散文の文体（ジャンル）上に見える新たな胎動に関して考えてみた。付言すれば散文の一部、たとえば上記の「説」や後で高橋未来氏が分析する「状」などは、杜甫が上官や天子に政策や軍事上の意見を述べたもので、そうした実務的・政治的なことに関する杜甫の関心と能力を窺わせ、新たな杜甫の人間像が浮かび上がってくるようで興味深い。

以上のような考察は中間報告というより、まだ始まったばかりだが、杜甫が散文の中で、伝統的な様式を踏まえつつもそこからどのように新しい表現を試みたかを考えることは、これまで詩に集中していた杜甫文学の全体像を明らかにする上で大きな意義があるだろう。